

## 第 585 回関西文学散歩・報告①

2023 年 11 月 12 日開催

天気：晴れのち時雨 参加人数 30 名

### ～蕪村・呉春・応挙、京都で語るそれぞれの恋模様～

今回の課題図書（テキスト）は葉室麟の「恋しぐれ」。かねてからこの作家に興味はあるものの手に取らないまま来てしまった。テキストを初めて熟読しその作風に魅かれた。まず内容が且つての京都画壇での出来事であるということだ。

日本画に使われる岩絵具、繊細でありながらも力強い線を引く面相筆とその美しさに魅了されて、たびたびギャラリーには足を運んできた。偶然にも京セラ美術館で竹内栖鳳を見て、大阪中之島美術館では長澤蘆雪展に足を運び福田美術館の学芸員、岡田秀之氏のレクチャーを聞いてきたばかりであった。

物語は俳人であり絵師でもある与謝蕪村の老いらくの恋から始まる。夜半亭という句会を催している 67 歳の蕪村であるが、京には他に伊藤若冲、池大雅、曾我蕭白らが画業を競っていた。江戸では浮世絵が庶民にもてはやされ、鈴木春信、勝川春章らが美人画を描いている。しかし京都画壇の絵師たちは、いずれも南画、あるいは写生画を描いていた。

絵師としての第一人者は円山応挙であり、ついで若冲、大雅、蕪村の順で、当時の絵は中国から渡ってきた絵を粉本（ふんぼん：手本）としてそのまま描くものとされてきた。ところが応挙は道端の草花から犬、猫まで細かく写生するのだ。私の知人に日本画家がいるが彼は常に「写生こそが基本である。そして古いものから学び、新しいものを取り入れることを恐れてはならない」と言う努力の人である。

今回の恋しぐれは京都画壇のありようを知るようでとても興味深く読んだ。物語としても七つの連作短編集で実に人間味あふれるエピソードがちりばめられて楽しかった。特に主人公の蕪村が美術家として作品を生み出す時、恋は力になったかもしれないと思う。心のゆらぎ、感情があふれ出すとき、その気持ちを冷静に詠んで私達の心を打つ。

春雨や ものがたりゆく簑と傘  
泣きんきて 花に隠るる 思いかな  
ちりて後 おもかげに立つ ぼたん哉  
老いそめて 恋も切なれ 秋の暮

テキスト：葉室麟『恋しぐれ』（文春文庫）

コース：「清水五条」駅…宮川筋…松原橋…不動寺…京都市学校歴史博物館…花咲稲荷神社（貞徳邸宅跡）…仏光寺…豊園水…蕪村宅跡…応挙邸跡…月溪宅跡…京都大神宮（解散）…阪急「河原町」駅 または 京阪「祇園四条」駅

<報告：田原由美子>

「蕪村・呉春・応挙、京都で語るそれぞれの恋模様」

2023年11月12日（日）カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第585回 参加報告②

蕪村の主宰する夜半亭は「師匠の句に泥（なじ）まないこと。泥むとは深く熱してとらわれること。師匠の俳句にとらわれすぎて自分の俳句を見失ったらだめだ。それぞれがそれぞれの俳句を築きあげていくのが夜半亭流だ」、と。

俳句のみならず絵も同じだと私は思う。応挙は物の形を通して心を伝え、見たままを描く、というのは簡単なようであるがいきできない。人は誰しも見たいものを描きがちである。

11月12日、清水五条駅集合。参加者32名。課題図書は手元にあるものの、読みかけのまま当日を迎えた。まず宮川町の花街の通りをながめながら松原橋へ。ここは牛若丸と弁慶の逸話で有名なあの五条大橋のことだそうである。明動院不動寺を経て京都市学校歴史博物館へ。

こちらは本日の一番の収穫であった。京都では他のどの県よりも先がけて明治2年に最初の学区制小学校を、何と64校の「番組小学校」を一斉に開校したというのだ。これは画期的なことである。近世京都には「町組」という住民組織があり明治維新前後に「番組」と呼ばれるようになった。「まちづくりは人づくりから」と京都では教育に力を注ぐようになった。一つの番組に対して自治機能をもたせる形で小学校が開校されていった。授業科目は「句読」「暗誦」「習字」「算術」の四課目。「図画」のある学校もあったそうで伝統を重んじる京都ならではの日本画や陶芸に必要な絵画の基礎を習得するためだったようだ。校舎の建設には京都府が各番組の全戸別に半年に一分の軒金が課せられた。又、有志による寄付もあり、室町（むろまち）近くの明倫小学校は、本格的な茶室や大広間も備えたすばらしい造りで今では芸術センターとして活用されている。芸術家が席主となる趣きのあるところみの茶会が時折もよおされ、私も何度か参加したことがある。こちらの学校歴史博物館の現在の館長は上村淳之氏だそうである。こちらには数々の名画や有名な陶芸作品も収蔵されていて、昔の記録写真や資料とともに詳しい説明を学芸員の方からお聞きし、京都在住の方の質問にもていねいにお答えいただき、有益な時間を過ごすことができた。

昼食後、午後は花咲稲荷神社、佛光寺、そして秀吉の聚楽第別邸「龍臥城」の跡であり、茶の湯に邸内の井戸から湧き出る水を秀吉が好んで使用したという〈豊園水〉と呼ばれる湧水が現在も維持・保管されている。

与謝蕪村の宅跡、月溪（呉春）宅跡と巡り、そして近世日本画家の中で際立って「写生」を重視し近代の京都画壇の源流となった円山応挙の邸宅跡は四条通りのビルの前に〈駒札〉とともに置かれている。

葉室麟は大学卒業後、地方新聞社を経て50歳で作家活動に入り2012年に「鯛ノ記」で直木三十五賞を受賞。そして66歳で他界している。尾形光琳と陶工尾形乾山兄弟を描いた「乾山晩愁」（角川文庫）は是非、読んでみたいと思っている。 <田原由美子>